自分の力で相手に伝わるスピーチを

秋田市立桜小学校　教諭　吉川　庸子

１．はじめに

本校は令和２年度から外国語専科が配置され、５、６年生の外国語科の授業を行っている。今年度は、３、４年生の外国語活動も専科担当の学級があるため、３年生から６年生までの外国語学習における発達段階を肌で感じることができる。小学校での外国語教育が本格実施されてから３年、子どもたちの英語に対する抵抗は下がり、能力は年々向上しているように感じる。そうした子どもたちの姿を、６年生の「Unit 3 Let's go to Italy.」を通して紹介する。

２．活動の実際

単元名　Unit 3 Let's go to Italy.
学　年　６年生

単元の学習計画

時	学習内容
1	ALTの国紹介を聞く
2	おすすめの国について調べる
3	おすすめの国のスピーチを考える
4	おすすめの国のポスターを作る
5	おすすめの国の中間発表をする
6	アドバイスを基に発表を改善する
7	おすすめの国について紹介する
8	他グループにコメントをする

〈ALT による国紹介〉

（１）様々な国との出会いとインプット（第１時）

単元の導入では、ALTが実際に旅行した国々をパワーポイントで紹介した。母国であるアイルランドを始め、オーストリアやブルガリアなど、子どもたちになじみのない国々もある。他国の美しい景色や美味しそうな食べ物についての説明を、子どもたちは興味津々で見て、聞いて、考えている。紹介には、本単元で扱う“You can see/eat/enjoy～.”を中心に、“It's～.”や“My favorite ○○ is～.”など、既習表現も盛り込まれている。いくつもの国紹介を聞いているうちに、子どもたちは自然と英語表現をインプットしていく。

国紹介を聞いた後、行ってみたいと思った国を１つ選び、その理由を全体で共有した。「ジェラートを食べたい」「風車を見てみたい」「買い物を楽しみたい」など、様々な意見が出た。それらの言葉を英語にできないか問うと、「食べるはeatだ！」「見るはsee！」「楽しむはenjoyだ！」と次々と既習表現が出てきた。すると子どもたちは、「あれ？知っている言葉ばかりだ。」「簡単だ、自分にもできそう！」と、国紹介の発表に前向きな気持ちを抱いていた。

Do you know this flag? This is Switzerland.
You can go to Lake Geneva.
Frankenstein is from Lake Geneva.
You can eat Swiss cheese and chocolate.
It's very delicious!

最後に、自分が紹介したい国をPicture Dictionaryから選んでもらった。例年はアメリカやフランス、ブラジルなど、子どもたちになじみのある国に希望が偏る。しかし、今回はドイツやガーナ、モロッコやスウェーデンなど、調べたい国の幅が広がった。恐らく、今年度のALTの出身国がなじみのなかったアイルランドであることや、紹介された国が多岐にわたったことにより、子どもたちの興味の幅が広がったためではないかと考えている。

（２）「伝えたい」気持ちと「わからない」の自覚と「言える！」自信（第２・３時）

２時間目は、司書の先生に用意してもらった各国の観光ガイドブックを使い、担当の国について調べた。「観る・食べる・楽しむ」に分かれているため調べやすく、魅力的な写真もたくさん載っている。始めにガイドブックでその国について概観し、詳しく調べたいものについてはタブレットを使用してもよいこととした。子どもたちは調べていくうちに担当の国の魅力をどんどん見付け、「どれにしよう。これも良いし、これも面白い！」と、発表する内容に悩み、「伝えたい！」という気持ちを育てている。

〈グループで調べる様子〉

３時間目は、前時に調べた内容を英語で伝え合う活動を行った。チャンツで言い慣れてきた“You can see/eat ～.”の表現を基に、調べた内容をお互いに英語で言ってみた。すると「〇〇って何て言うんだ？」と、「わからない」を自覚した声が聞こえてくる。子どもたちが言いたいことについて、いくつか質問を取り上げる。例えば、「海中散歩ができる」は何と言うか質問があった。子どもたちに、「海中散歩という言葉は難しい。１年生に説明するとしたら、何て言う？」と尋ねると、「海の中を歩く」という言い換えが出てきた。それなら、“You can walk in the sea.”と言える。このようなやり取りをいくつか繰り返すと、「自分の知っている英語で言えるんだ！」と子どもたちは思い始める。全ての質問に答えなくとも、考え方がわかった子どもたちは、「自分でできそう！」という気持ちになっている。友達と何度か伝え合っているうちに「言える！」自信が付き、“It's fun!”など、説明を少しずつ付け足していた。

（３）相手に伝わるスピーチにするために（第４・５・６時）

４時間目は、コラボノートでポスター作成をした。コラボノートの利点は、メンバー全員が一斉にポスター上の作業ができること、写真を簡単に載せられること、修正が簡単なこと、各グループの進捗状況の確認が簡単なことだと感じた。英語を「書く」だけではなく「打ち込む」ことに慣れるのも利点の１つかも知れない。例年は手書きで、じっくり見て書く良さもあったが、時間がかかり、英語の音声に触れる時間が削られていた。また、ポスター作成の際は、相手は地名や食べ物など初めて聞く言葉が多いこと、発表の際に聞いている人たちの理解の補助になることを意識するよう促した。

〈コラボノートで作成したポスター〉

５時間目は、２グループずつのペアになり、互いの発表を見合った。その際、発表する側はタブレットでポスターを見せながら、聞く側は録画しながら行った。聞く側は発表を聞いた後、発表の仕方や内容についてアドバイスする。理解できなかったものは「わからない」とはっきり言ってもらう。すると、子どもたちは言い換えたり、指さしやジェスチャー、説明を付け足したり、ポスターを修正したりしていた。また、録画した動画を見て「下ばかり向いている」「ゆらゆらしている」「思ったより声が小さい！」など、自分の姿を客観的に見て、気付いた点を自主的に改善しようとしていた。

〈お互いの発表を録画する様子〉

６時間目は、前時の反省を生かして自分たちの発表を改善していく。その過程で、英語表現で困ったときはJTEやALTに声を掛ける。最後にJTEやALTに見せることで、本番に向けてさらに自信を付けていた。

（４）友達を通して世界を知る（第７・８時）

〈コラボノートの付箋機能でのコメント〉

７時間目は、国紹介の発表を行った。他のグループがどんな発表をするのか、子どもたちもわくわくしている。発表は、ミスやエラーもあるが、前時のアドバイスを基に「行きたい！と思ってもらえるように伝える」ための工夫がされている。

８時間目は、コラボノートの付箋機能で、他グループにコメントした。発表の仕方や内容を褒められるだけでなく、「行ってみたい！」というコメントに、子どもたちは喜びを感じていた。ある子どもの最後の振り返りに、「私はあまり外国に行きたいと思わないので考えたことがなかったけど、外国にはきれいな景色や不思議な食べ物があると知ったときは、少し行ってみたいなと思った」とあった。子どもたちが発表を見合い、相手の気持ちを動かすことができたということは、「相手に伝わった」という何よりの自信になるのではないだろうか。

３．おわりに（成果と課題）

これまで言語活動を中心に学習を進めてきた成果として、子どもたちは「決まったものを言って終わり」ではなく、基本の表現をもとにどう伝えたらよいか自分で考え、相手の様子を見ながら反復したり付け足したりしながら話せるようになってきている。その一方で、英語の正確性が疎かになっている様子も見受けられる。

今後の課題として、自由度と正確性のバランスをとること、伝える内容を充実させながら英語に触れる時間も十分に確保することが挙げられる。「伝えたい！」という気持ちを育みながら、こうした課題と向き合って実践を積み重ねていきたい。